

「上毛古墳綜覧」刊行

取りまとめに

尾崎喜左雄氏

昭和13年（一九三六）「上毛古墳綜覧」が上梓された。この歴史資料は、群馬県が「古墳大国」であることを象徴するものの一つである。

この書に集約された八四二三基の古墳情報は、現在の研究精度から見れば、その制度や正確さが十分とは言いい切れない。しかし「上毛古墳綜覧」及び膨大な量の「古墳調査票」

尾崎 喜左雄氏

おさき・きさお 神奈川県生まれ。1936年東京帝国大学卒、国史研究室勤務。群馬県嘱託や応召を経て群馬大学教授へ。1978年逝去。



とその添付資料には、古墳に関する当時の情報が多く盛り込まれている。これらの情報は、群馬県が古墳大国であることを体現するためには不可欠なものである。

「上毛古墳綜覧」及びその他の資料。これらは、現在私たちが訪れることができる古墳が、昭和10年段階でどのような状態であったかを知ることができる。さらに現在失われてしまった古墳において、かつての姿や情報を得ることを可能にする。

尾崎研究室の調査
～群馬県沼田市
奈良古墳群にて～

尾崎氏が実際に関わった調査は、「鏡手塚古墳」に始まる。実際に関わった古墳、およそ300基。そのうちのひとつとして「奈良古墳群」をあげる。

奈良古墳群は群馬県沼田市奈良町に位置する古墳時代終末期の群集墳である。昭和55年に沼田市史跡に指定され、令和2年に約3.6万平方メートルが県史跡に指定された。また、出土品280点も昭和52年に市の重要文化財に指定された。製造時期は古墳時代終末期の七世紀と推測されている。

尾崎研究室は昭和30年の2月と4月に調査を行い、その際の調査では古墳の痕跡と推測されるものも含めて59基の分布が確認されたが、開田事業によ

尾崎研究室 大盛況
岩宿遺跡発見の相澤忠洋氏も

尾崎研究室のところには、連日さまざまな方が来室した。その都度、尾崎先生は、非常に丁寧な対応をしていた。決して暇であつたわけではないだろう。しかし、自身の研究を後回しにしながらも、来客にきちんと向き合う時間を作っていた。その様子がよく分かるエピソードがある。

地域の郷土史研究家を名乗る人がよく訪れた。考古学ファンの方々である。しかし、訪れた考古学ファンは、何も年配の方だけではない。当時「考古ボーイ」

と呼ばれていた、考古学が好きな小中学生がいた。近所の山をめぐり、土器やその破片などを集めていた。その収集物を尾崎氏のもとへ持ち込み、「これはどういったものなのでしょうか。」といったことを質問していたようだ。尾崎先生は「何年か経つと、どこで拾ったものかわからなくなるから、細い筆で書いておきなさい。」とアドバイスをし、毛細筆で記入をしたそうだ。子どもだからと言って、蔑ろにはしなかったのである。

また、岩宿遺跡の発掘に携わり、日本に旧石器時代があつたことを発見した、相澤忠洋氏も尾崎氏のもとを訪ねている。

当時の学生は、お茶くみや資料運びなどをしながら、来客者と尾崎氏の話に耳を傾け、「耳学問」として学びを得ていたようだ。尾崎先生も学生のそういった学びを推進しており、「あの資料を持つてきなさい。」などといった声掛けを学生にしていたそうだこれによって、堂々と聞く大義名

分が作られていたのである。さらに、尾崎先生は地域の人にも失礼のないように、研究生にも指導されていたようだ。

尾崎氏は、誰が相手であつても丁寧な話を聞いた。そのため、人が人を呼んだ。「もし、考古学の分野で分からないことがあれば、群馬大学の尾崎先生のところへ行こう」。このように言われ



奈良古墳群の全景（沼田市）（提供：沼田市教育委員会）

て多くの小規模古墳が破壊され、現在は13基の古墳が残り、それらはいずれも直径5～10メートル程の埴輪を伴わない小円墳である。また、平成11年には土地改良事業に伴って9基の古墳の発掘調査が行われた。4月1日の6日間かけて実施された奈良古墳イ号・ヤ号・ソ号・フ号・カ号・ワ号古墳の計6基の発掘調査では、墳丘が失われていたカ号において、埋葬施設である横穴式石室から鉄製鐙（鞍の両脇にさげ、騎者の足をふみかける馬具）が出土した。この出土品の残存状態が良好で原型をとどめたものであったため、群馬県の古墳時代の馬具を代表するものの一つとなっている。

古墳・考古学の功績大

横穴式古墳研究で

年代判明

尾崎喜左雄博士の研究が考古学界に残した功績は計り知れないものがある。その中でも今日まで名著として知られているのが『横穴式古墳の研究』である。

これは尾崎博士が古墳の年代を割り当てるときに用いた方法の一つである。これは過去の榛名山の噴火による火山堆積物から年代区分の特定を試みたものである。

尾崎博士が群馬県で古墳研究をされていた頃の時代、尾崎博士は古墳の遺構から採取される火山堆積物を調査することにより、古墳に年代区分を割り当てる調査方法を確立したのである。現代においては他の方法で

て学会に非常に注目される古墳時代の遺跡の一つである。榛名山の噴火による火山堆積物を基とした方法は金井遺跡群の年代区分を決定することに大きな役割を果たしている。さらに、火山堆積物に注目することでこの遺跡群が二度の火山災害を受けていることまで明らかとなっている。

『横穴式古墳の研究』
一九六六年出版。吉川弘文館発行



前橋の古墳 鏡出土 取り上げに尾崎氏

前橋市広瀬町にある前橋天神山古墳。形状は前方後円墳である。しかし、現在では、前方後円墳の中心部である粘土層のみが保存されている。もと、昭和40年の話し合いでは、古墳全体を保存する見通しもあった。しかし、昭和43年にブルドーザーによって削られた。当時の開発ブームと広瀬団地の建設のためによるものである。急遽調査が決定した前橋天神山古墳だが、かつて、全長129mを記録した前橋天神山古墳は、見る影もなかった。

前橋天神山古墳からは粘土層が出土した。その際、調査隊に興奮が走った。当時群馬県には、本格的な粘土層の発掘事例がなく、奈良県を中心と

する調査報告書を頼りとしていた。また、限られた人で計画的に調査が進められた。その都度図面や写真に収めていった。

前橋天神山古墳の王を埋葬した粘土層は、長大な木棺を安置できる大規模なものであった。出土した副葬品として、三角縁神獣鏡を始めとする銅鏡5枚や銅鏃、鉄鏃や斧や鏝などの農具類、鉄刀、太刀などの鉄製武器類が出土した。また、墳頂部には、赤く塗彩した底部に、丸い穴をあけた葬送用の壺が並べられていた。出土した遺物を保管・管理する場所もなかったため、旧上川淵役場跡の大谷石づくりの倉庫で保管し、厳

重に整理作業をしていた。現在、出土した遺物は、東京国立博物館で保管されている。



前橋天神山古墳

発掘 エピソード

② 一大イベント

尾崎氏が生涯で鏡を取り上げることができたのは、前橋市天神山古墳が初めてである。そして、三月に退職を控えていた尾崎氏が取り上げることのできる最後のチャンスであった。ここは、尾崎氏に鏡を取り上げてもらおうと、当時の調査隊は働きかける。鏡を取り上げる当日の先生の身支度も気合の入ったものであり、特別な日となった。



発掘 エピソード

① 借りてきた〇〇

粘土層の調査は限られた人で計画的に進められた。その都度、図面と写真に収めていった。当時はもちろんドローンや小型カメラなどない。古墳全体を撮影し、記録するのに一苦労だった。尾崎研究室が前橋天神山古墳発掘調査を行った時もその問題については回った。そこで借りてきたのが、当時県内最大だった前橋消防署のはしご車である。上って撮影した生徒さんは生きた心地がしなかったらしい。一つの記録写真からも当時の試行錯誤がうかがえる。

